

かかるそうだ。食べ物、飲み物その他はもちろん別会計での話である。

オペルンバルでは特別に最上階のギャレリーのみ物見高い観客用に解放されている。解放される、とはいっても観覧入場料はとられる。禁食・禁飲・禁舞踏ながら、ハイソサエティーの雰囲気を眼下に眺めて喧騒を耳にし、その人いきれの匂いを感じることぐらいは可能である。

舞踏会を楽しむためにかかるお金は、なにも入場券と飲食費のみではない。イブニングドレスの調達に始まり、美容院代などもバカにはならない。ドレスを買えば靴が合わぬ、靴が合えば今度はハンドバッグの色と揃わない、と、限りなく騒がしいのは世界の女性の共通項のようだが、男性はスモーキングか燕尾服一着で間に合うので安上がりだ。貸衣裳屋もあるが、シーズン中にちょっと大きめの洋服専門店に行くところのよいうな男性用礼服が揃うのでズラッとぶらさがっており、日本で買うよりずっと安いし、サイズやデザインも豊富である。もしまだならおひとつ如何ですか？

## ダンスを習おう！

そもそも音楽の起源はどこに求めるべきか？などと難しい事は、あまり考えないほうが身のためである。際限のない問題だし、音楽と一口にいつてもそれこそ千差万別な種類がある。たとえある程度手応えのある知識を得たとしても、それが日常の「音楽の楽しみ」の助けにはなるだろうか？？

それよりは音楽を「宗教音楽」と「世俗音楽」とに区分けしてみる方がわかりやすく、我々が普段から馴れ親しんでいる西洋音楽との接点が多い。

キリスト教の持つ空前絶後のエネルギーとともに発達したヨーロッパの宗教音楽は、人類の貴重な財産の

ひとつである。しかしこれも石で作られた巨大な教会という演奏の場がなかったら、果たしてここまで雄大になり得ただろうか。同じ賛美歌でも余韻をもって朗々と響きわたる教会で聞くと、その「有難さ」が即座に倍加するように感じられる。こうした残響の助けを借りると、ちょっとくらい音痴の司祭でも自信をもって堂々と気持ち良くミサを営めてしまえそうである。

世俗音楽とは——民謡などをはじめとする「民衆音楽」を別個に扱わない限り——一般には宗教音楽以外のもの全てを包括する。その昔王宮や貴族の宮殿での食事の際にBGMとして演奏された「ターフェルムジーク」もそうだし、数多いダンス音楽もしかりである。

ダンス音楽は、歴史の流れの中でいろいろな民族と共に栄え、それぞれの特徴を表現こそすれ、音楽芸術としての発達はさほどみられなかった。それもそのはず、どうあがこうとも人間にとっては二本の足ステップをきざむ以外の形態は、不自然である。これに対してターフェルムジークはさまざまアイデア、リズム、楽器の組み合わせ方の工夫などによって、日進月歩の勢いで発展した。その成果は今日のコンサートホールで、そして科学の粋をつくして完成されたオーディオ機器を通して、日夜堪能できる。

ヨーロッパの上流階級で男女がペアとなって踊られるようになったのは、今から二百五十年ほど前のことである。ペアで、となると、前もって足の運び方を決めておかないと、お互いの足を踏みつけ合うだけで終わってしまう。そのために考案されたのが各種のステップである。ステップが一般的になれば、それを教える専門家が登場する。こうしてオーストリアに最初のダンス学校ができてから、すでに二百年以上の時が流れた。

数世紀も前に踊られたメヌエットやガヴォットなど、バッハやヘンデルの組曲に出てくるようなダンスは、もはや通常の場では見かけない。それに代わって、今日世界共通のスタンダードのダンスとして決まっているのは「スローワルツ」「ウィンナーワルツ」「フォックストロット」「タンゴ」「ブルース」「ルンバ」

「チャチャチャ」「サンバ」「パソ・ドゥーブル」「ジャイヴ（ロックンロールやブギウギ）」「ディスコダンス」の十一種である。これらが全部こなせれば、どんな舞踏会に行こうとも絶対に困らない。

その上どんなダンスでも三十分踊ると百五十から二百カロリー、ロックンロールにおいては実に三百カロリーというジョギング並みの運動量で、体力向上の助けにもなれば、ダンスで「楽しく痩せる」事も可能だろう。ただしチークダンスは別である。

ダンスの好みも時代とともに変わってきた。特に若者向きのステップにはそれぞれの時代の文化の反映が感じられる。今世紀初頭の「ケークウォーク」、一〇年代の「ベアダンス」「タンゴ」「フォックストロット」、二〇年代の「チャールストン」、三〇年代は「スウィング」、四〇年代になると「ブギウギ」、五〇年代の「ロックンロール」、六〇年代は「ツイスト」、そして七〇年代が「ディスコ」で八〇年代には「ブレイクダンス」と続く。何となく甘酸っぱい響きのする名前の数々ではないだろうか。

最近「ランバード」というブラジル生まれのセクシーなダンスが紹介されたが、これは九〇年代のメインになるだろうか。ダンスそのものは以前からあったのだが、あまりのセクシーさのためにオーストリアでは禁止されていた、という、いわくつきのダンスである。

これらのダンスを教えてくれる学校はどの国にもある。しかしオーストリアのダンススクールは二世紀も歴史を誇るだけに、他の国には見られない特徴がある。それは「躰」。若者がござって受講にくるのもこの土地ならではの、名門のタンツシューレはすなわち花嫁・花婿学校と言ってもおかしくない。それだけにここに集まってくる生徒には、どちらかという上流家庭の子女が多い。

たとえば「映画館や演奏会場で人の膝前をすりぬけてしか自分の席に行けない時、その列の人に対面する向きで通してもらおう」とか「花束を贈る時には前もって包み紙を取ってから手渡すのが正式」とか「電話の応対にはまず自分の名前を。『ハロー』では失礼」その他、公共の場での挨拶や自己紹介の仕方、人を紹介

する時の作法からはじまって、ダンスのパートナーを依頼する時の礼儀など、色々な場面での対応の仕方を教わる。

これらは特に舞踏会の時ばかりに限らぬ一般の礼儀作法でもあり、生徒達が将来実社会で必要とする事ばかりだ。挨拶の際にオーストリアでは一般によく行われる男性から女性の手にするキス、女性がお辞儀をする時にちょっと腰をかかめる仕草などは、皆タンツシュレで教えられる作法である。

タンツシュレに通っているのであれば、舞踏会に行かない、という手はない。講習のカリキュラムは通常秋に始まり、ずぶの素人でも一生懸命練習すれば年明けの舞踏会シーズンには充分間に合う。単に一般客として踊るだけでは飽き足りない若者たちには、特別に舞踏会のオープンニングに備えての特訓もある。

オーストリアのタンツシュレは、それに適した国家資格を持つ人でないと開校できない。現在オーストリア国内で約七十校、そのうちほぼ三分の一の学校がウィーンにある。舞踏会の王者ともいえるオペルンバルのオープンニングに出場するには、まずオーストリア国内いずれかのタンツシュレに入学し、学校を通してオープンニング参加希望の申し込みをする。

十月初旬にある舞踏会事務局長の面接に続いて、十一月には実際に国立歌劇場のゴブランザールにてオープンションが行われる。オープンションでの課題はただひとつ、「左回りのウインナーワルツ」である。毎年五百から六百組ある応募者の中から実際にオープンニングにデビューできるのは百七十六組のみであり、かなりの競争率といえよう。

その気になりさえすれば、昔宮廷で踊られたようなアンティークなダンスが習えるのもオーストリアのタンツシュレの特徴のひとつだろうか。興味を覚えて習いにくる人が結構いるという。ダンスを習いに来るのは、何もティーンエイジャーばかりではない。「老いも若きも」がモットーである。